

主日礼拝説教「天を仰いで星を数えてみる」予稿

日本基督教団石神井教会 2021年11月7日

【旧約聖書日課】創世記 15章1～18節

1これらのことの後で、主の言葉が幻の中でアブラムに臨んだ。「恐れるな、アブラムよ。わたしはあなたの盾である。あなたの受ける報いは非常に大きいであろう。」

2アブラムは尋ねた。「わが神、主よ。わたしに何をくださるというのですか。わたしには子供がありません。家を継ぐのはダマスコのエリエゼルです。」3アブラムは言葉をついだ。「御覧のとおり、あなたはわたしに子孫を与えてくさいませんでしたから、家の僕が跡を継ぐことになっています。」

4見よ、主の言葉があった。「その者があなたの跡を継ぐのではなく、あなたから生まれる者が跡を継ぐ。」

5主は彼を外に連れ出して言われた。「天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい。」そして言われた。「あなたの子孫はこのようになる。」

6アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。

7主は言われた。

「わたしはあなたをカルデアのウルから導き出した主である。わたしはあなたにこの土地を与え、それを継がせる。」

8アブラムは尋ねた。「わが神、主よ。この土地をわたしが継ぐことを、何によって知ることができましょうか。」

9主は言われた。「三歳の雌牛と、三歳の雌山羊と、三歳の雄羊と、山鳩と、鳩の雛とをわたしのもとに持って来なさい。」

10アブラムはそれらのものをみな持って来て、真っ二つに切り裂き、それぞれを互いに向かい合わせて置いた。ただ、鳥は切り裂かなかった。11禿鷹がこれらの死体をねらって降りて来ると、アブラムは追い払った。

12日が沈みかけたころ、アブラムは深い眠りに襲われた。すると、恐ろしい大いなる暗黒が彼に臨んだ。13主はアブラムに言われた。

「よく覚えておくがよい。あなたの子孫は異邦の国で寄留者となり、四百年の間奴隷として仕え、苦しめられるであろう。14しかしわたしは、彼らが奴隷として仕えるその国民を裁く。その後、彼らは多くの財産を携えて脱出するであろう。15あなた自身は、長寿を全うして葬られ、安らかに先祖のもとに行く。16ここに戻って来るのは、四代目の者たちである。それまでは、アモリ人の罪が極みに達しないからである。」17日が沈み、暗闇に覆われたころ、突然、煙を吐く炉と燃える松明が二つに裂かれた動物の間を通り過ぎた。18その日、主はアブラムと契約を結んで言われた。「あなたの子孫にこの土地を与える。」

【福音書日課】 マルコによる福音書 12章18～27節

¹⁸復活はないと言っているサドカイ派の人々が、イエスのところへ来て尋ねた。
¹⁹「先生、モーセはわたしたちのために書いています。『ある人の兄が死に、妻を後に残して子がない場合、その弟は兄嫁と結婚して、兄の跡継ぎをもうけねばならない』と。²⁰ところで、七人の兄弟がいました。長男が妻を迎えましたが、跡継ぎを残さないで死にました。²¹次男がその女を妻にしましたが、跡継ぎを残さないで死に、三男も同様でした。²²こうして、七人とも跡継ぎを残しませんでした。最後にその女も死にました。²³復活の時、彼らが復活すると、その女はだれの妻になるのでしょうか。七人ともその女を妻にしたのです。」²⁴イエスは言われた。「あなたたちは聖書も神の力も知らないから、そんな思い違いをしているのではないか。²⁵死者の中から復活するときには、めとることも嫁ぐこともなく、天使のようになるのだ。²⁶死者が復活することについては、モーセの書の『柴』の個所で、神がモーセにどう言われたか、読んだことがないのか。『わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』とあるではないか。²⁷神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。あなたたちは大変な思い違いをしている。」

星を数える【こども説教のために】

伝統的な教会暦の一巡りの終わりが近づいています。再来週の「終末主日」で一巡りが終わり、その後、新しい一巡りの始まり、「待降節」を迎えます。

この一巡りの終わり、「終末主日」を、わたしたち日本基督教団では「収穫感謝日」とも呼んできました。もともとは、神がこの年にお与えくださった「地の実り」の収穫を祝い、感謝するために定められました。最近、スーパーに行けば季節に関係なくいつでも何でも手に入るようになりましたが、それでも、この秋の季節が、多くの「実り」を与えられ、「食べ物」として分かち合う喜びを共にすることのできる時であることには変わりないでしょう。

もちろん、神がお与えくださる恵みは、季節ごとの「地の実り」だけではありません。お造りくださった「天と地」のすべてが、わたしたちに与えられた神の恵みです。ただ、そのことを忘れてしまったり、気づけないこともあります。

旧約日課（創世記 15 章）のアブラムは、なかなか子が与えられないことで、神のお与えくださる恵みが分からなくなってしまっていました。家に閉じこもり、下を向いて悶々としているアブラムを、神が幻のうちに外に連れ出して、空を見上げさせられました。そこには、数えきれない星々が輝いていました。「数えてみるがよい」と呼びかけられたアブラムは、星の数を数えるよりも先に、その星々の輝きに圧倒されて驚いたことでしょう。忘れていたのです。神のお与えくださる恵みが、これほどに豊かで輝かしいものに満ちていることを。

神は「生きている者の神」

アブラムは、この出来事の後に、神から新しい名「アブラハム」を与えられます。そして、その名と共に神から与えられたのが、妻サラとの間に生まれてくる跡取り「イサク」の名でした。アブラハムの子はイサク、イサクの子はヤコブと、「創世記」の物語は続きます。

福音書日課（マルコ 12 章）で、主イエスは、この三人の名を挙げた聖句、「わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」を引用されています（出 3:6）。この表現は、主イエスが「モーセの書の『柴』の箇所」と言われている箇所だけでなく、「聖書」の中で繰り返し出てくるものです。ユダヤ人が自分たちの信じる神を言い表すのに、しばしばこの表現を用いていたのです。しかし、その句を引用されて、主イエスは、少しばかり大胆なことをお語りになられました、「神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ」と。

このとき、主イエスはユダヤ人の中の一つの党派である「サドカイ派」の人々と議論をしていました。彼らは、ユダヤ人の中では権力に近いところにいた人々です。庶民の中で活動していた「ファリサイ派」とは、しばしば対立していたと言います。両派の対立点としてよく知られていたのが、「復活」を信じるかどうかという点でした。ファリサイ派は「終末の復活」を信じていましたが、サドカイ派は信じていませんでした。主イエスは、「終末の復活」をファリサイ派同様にお教えになられています。そこで、サドカイ派の人々は、「終末の復活」の間違いを論おうとして、主イエスに議論を仕掛けたのです。

それに対して、主イエスは、「死者の中から復活するときには…」と、「復活」がどのようなものであるのかということをお語りになられました。しかし、そもそも「復活」を信じていなかったサドカイ派の人々の心には、そのような説明は届かなかったのではないのでしょうか。そこで、彼らの心に少しでも届くようにと持ち出されたのが、あの「わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」の句であったのでしょうか。彼らもよく知る聖句だったからです。この句を、少しばかり強引に、「復活」の意味を理解させるために用いられたのです。

「神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ」。それは、わたしたちの神が、死者は相手にされない、ということではないでしょう。大昔に死んだ太祖のアブラハムも、イサクも、ヤコブも皆、今でも神の前では「生きている者」として憶えられ、生かされている、ということです。たとえアブラハムが地上の生涯を終えたとしても、神は、彼の存在を永遠に憶え続けてくださるのです。彼が地上で見るものが少なかったとしても、神は、永遠の時間の中で彼に対して大きな恵みをもって、多くのものをお与えくださっているのです。アブラハムも、そのような神の力を知らされ、信じた者だったのではないかと、主イエスは、わたしたちに思い起こさせようとしてくださっているのです。

天を仰いで

先週、一人の姉妹の葬送をこの礼拝堂で始めました。事情があつて、葬送の式を終えるのは来週になります。しかし、まずは姉妹のご遺体を礼拝堂にお迎えし、教会の皆さんと共に祈り、讃美を歌い、御言葉を聴くときを持ちました。死者に対して、わたしたちは、別れの嘆きや悲しみを抱きながらも、なお大きな希望を持っています。死者が「天上の礼拝に加えられている」と教えた使徒たちの言葉を胸に刻み、地上で礼拝を献げるたびに、天上の礼拝を思い、もはや、天と地の境目さえ取り払われて、神の御前に生者も死者も共々に立たされていることを希望とし、喜びとさえしてきました。

「**天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい**」とアブラハムに呼びかけられた神は、わたしたちにも「天を仰いで見よ」とお告げなのです。「天を仰いで、そこで大天使たちの礼拝に加わっている者たちの大群衆を見よ。彼らを数えることができるなら、数えてみるがよい。そこには、数え尽くすことができない多くの人々、否、すべての地上の生涯を歩んだ人々を加えられている。」

もちろん、わたしたちは、なお、地上に立つ者として、思い悩み、悶々とし、また嘆きや悲しみに押しつぶされそうになることがあるかもしれません。現実不起こっていることを目の当たりにして、やり切れない思いに襲われることもあります。わたし自身、先週、自分より若い従弟を突然亡くし、正直に言えば、今日ここに立つことから逃げ出したくなる思いで準備の日を過ごしました。それでも、主の日を迎え、天上を仰ぐ教会の営みの中へと連れ出されたのです。わたしは今日も、ここに立つ者とされました。

アブラムを家の外に連れ出された神は、今日、皆さんを、それぞれの閉じこもっていたところから外へと連れ出してくださったのです。そして、皆さんにお告げなのです、「天を仰いで見よ」と。「天上の営みを見よ」と。そこにあるのは、すべての者に命を与え、永遠にその存在を憶え、生かし続けてくださるお方の、力ある御業の数々、数えきれない恵みのしるしです。

わたしたちが「現実」と思って見ている足元で起こっている事々がすべてなのではありません。目を上げて、天を仰いで、わたしたちは、数え尽くすことのできない恵みの御業を見るでしょう。数え尽くさなくてよいのです。極め尽くさなくてよいのです。測り尽くすことも、究め尽くすこともできない天上の営みの真実に目を向ける者だけが、最後に与えられるものに希望を抱くことができるでしょう。そのときには、報われないと思われていた現実も、奪い去られるばかりと見えていた現実も、違ったものとして見え始めるに違いありません。

そうです、わたしたちは、この地をお与えいただきました、わたしたちが共に生きる地を。そうです、この人々をお与えいただきました、わたしたちが天の御父のもとに共に神の子らとして生きる人々、神の家族として生きる人々を。